

ハロウィン の妖精たち



黒野 ている

「いやだ————っ！！！」

絶っっっっ対

行かないwwwwwwww！！」

「大丈夫～♪ たくさん来るから 紛れてしまって誰が誰だかわかんないわよ」

アスカは大きな荷物を抱えている。

ターゲットは 僕だ。

「いいから 座って」

椅子をひいた彼女は諭しモードだ。

「お願いだから私の足にしがみつくのやめて」

上を見上げかけたところで 目隠しをされる。

「数あわせなのよ。人数さえそろってれば、それでいいの」

紙袋を開く音がひびく。

「顔も塗ってしまうから。さあ、座って」

今度は無理やり肩をつかまれる。

仮装なんてしたことないし、顔がわからないとはいえ どうしていればいいのか。

「フツーにしていれば いいの。間違っても目立っちゃダメ」

目立つつもりなんて…といいかけたところへ

顔に冷たいものが。

「目に入るから、閉じてて」

皮膚呼吸 できない…

「ごめんね 手っ取り早くドーラン買ってきちゃったから。
終わったら私が落としてあげるから、勝手に帰らないでね。」

最後までいろってこと？ マジで？

「仕方ないよね、コンテストの結果は最後に出るから。私はそれが目的だし」

頬から鼻に筆が走る。

「衣装は間違いないと思うから。」

なにが…？

「ああ 寸法」

採寸なんてしたっけ？

「そんなこと どうでもいいでしょ～」

眉毛の辺りがくすぐったい。

「笑っちゃダメよ～」

わらえないって

「もう しゃべらないで」

あごを上げられ

しばらく ときがとまる

なにしてるの

「どの色にしようか…迷っちゃった」

彼女の指が僕の唇の上をすべる

すべ…る…?

すべりすぎじゃない?

どこまで塗ってるのwwww!?

「だってえ

好きなんですもの」

「ドラキュラ伯爵」

メイクが出来上がってハロウィンの衣装をかぶせられた僕は鏡をみせてくれとアスカに言った。

「ちょっと待って。私も支度があるのよ」

なんか 蒸し暑い……

「外へ出れば涼しいから。夜なんて寒いくらいよ～」

去年は 水着に毛皮のロングコートを羽織った女の子が選ばれたらしい。コスプレはインパクトだからな。それにしてもゴージャスな衣装だったんだろうな。

「うん 狼女だったらしいわ」

肉食かい……！

そういえば ドラキュラは肉食になるんだろうか。どっちなんだろう？

「なに悩んでるの」

え？ いや にk……

息をのんで 言葉を失う僕の前に

ひかり輝く 彼女が……

クモ女 あああああああ あああ！

どちらかと聞かれれば

僕は オバケ屋敷では立ちすくむほうだと

そのとき 理解した。

光り輝くコスチュームで
クモ女となって君臨しているアスカに
固まっていた僕は・・・

ハッと気がついた

もしかして
このノリで…僕も？

ちょっと鏡みせてっ！

「えー？ 見たいの？」
笑いながら彼女が鏡を差し出す

これかぁ…

メイク用の鏡の中には
口から多量の血を噴き出した
瀕死のドラキュラがいた

なんかさ

言っちゃ悪いけどさ

血を吸うってより

死にそうじゃん…コレ？

「うそ〜? どこが!?!」

クモが近寄ってくる
顔一つ入るだけの鏡に

「見せてよ。そうかなあ?」

肩に触れる

「実物見るのと鏡で見るのって違うのよねー」

鏡に二つの化け物が映る

頬に触れる

心が揺れる

揺れる…?

・・・笑ってる

「塗りすぎて こと？」

なんで笑ってるの！
どーすんの これ？

「いやいや いーかもよ？
深酔いのドラキュラに激似かも・・・」

途中から言葉になってない

はやく人間になりたい・・・

アスカの変装したクモ女と
血を吹いたドラキュラの僕は
まだ小さな鏡のなかに頬を寄せている

「お似合い じゃな〜い？」

似合うも何も 黒と白と血のりの顔には
僕の面影など ない

「わからないほうがいいんでしょう？ ぜったいわかんないわ」

さあ そろそろ時間だから、と鏡を伏せて彼女は言う

「コンテスト終わったら このまま飲みにいこっか」

じょーだん やめてよおー

もー やめてえー

もー 帰りてー

ドアを開けると
暮れていく夕闇に 照明がまぶしい

思ったより冷たい風が吹く

でも

そんなこと感じられないくらい

僕は 緊張していた

「緊張するわー」

なんだかきみは… うれしそうだよ？

「このコンテストのために半年考えて準備したの。
あっちにみんな待ってるから、いくわよ」

スカイダイビングの心境なんですけど…

秋の宵に躍り出た僕とアスカ
人を怖がらせるといけないから

下を向いて歩こう

小さくなって

このまま消えたい・・・

「なんで元気ないのよ! ドラキュラは人を襲うほうでしょ?」

いいんだよ 血を吹いて死にそうな顔してんだから

ハロウィン・・・て

こんなの毎年やってるの?

「そうよ～♪だんだん参加する人増えてるのよ。
ほら みんなコスプレに抵抗ないじゃない、この頃さ」

たしかにあなたはなさそうだ

「いつもってワケじゃないから
今日だけだから恥ずかしさがないのよ～」

充分はづかしいですよ

ホント 顔がわかんなくてよかったよ

「あのさ」

アスカが立ち止まった

「お願いがある」

僕も立ち止まる

「今夜だけ 彼になって」

血を吐きそう・・・だった

「今夜だけって・・・!」

つい 声に出してしまった
今までモノローグ（心の声）だったのに・・・

「えっ?」
アスカがちいさく驚く

あああ・・・

食いつくところ間違えた・・・

「ダメなの?」

アスカ いいボケだ

そのままボケてくれ

どこまでもスルーしてくれ

「いや ダメとかじゃなくて なんで急にそんな話?」

「・・・見栄はっちゃったのお」

アスカが遠くを見ながら言う

「みんな 彼がいるし、この準備の間もそんな話ばかりだったの。
なんかくやしくて・・・聞かれたから つい言っちゃったのよ」

なにを？

「当日は 彼と行くわ・・・って」

アスカ

そんな潤んだ目でこっち見るな

もってかれるから

ドーラン塗ってなかったら

僕の顔は 赤いのか青いのか・・・

どっちがドラキュラかわかんなくなってきた

ねえ どうなの・・・と

アスカが 消え入りそうな声でたずねる

これ 告白モードだよなあ

でも 今夜だけって

それ

なんで

どうして・・・

しばらく答えられずにいたら

「無理なら いいわ。ごめんね」

アスカが振り切るように明るく言った

「他をあたるから」

なにい～？

「どこかにすばる君が来てるはずなのよ。声はかけたんだけど～」

クモの衣装のどこかからケータイを出そうとする

「アスカ？」

ケータイが光る

「待って」

開いたケータイごと 僕はアスカの手をつかんでいた

「今夜・・・だけなの？」

わかった
けど条件がある

僕は そうアスカに言った

「いいの?ホントにい?」
アスカは半信半疑な目で僕を覗き込む

ケータイが何回か震える
アスカは 出ない

そのかわり

今夜だけじゃなくて・・・

ああ こんなときに

言葉がでない

アスカが ケータイを落とす

着信が数回 消えてゆく

「それ マジなの・・・」

血糊のついた唇が動く

ごめん

アスカ

きみをドラキュラの一員にしてしまった

-fin-

ハロウィンの妖精たち

<http://p.booklog.jp/book/41520>

著者：黒野 ている

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/naomur/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/41520>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/41520>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.